秀作 2022

第55回「おかねの作文」コンクール

私の通帳

秋田県・秋田県立秋田南高等学校中等部　１年　山下　琥白

私には０歳の頃から通帳があります。その通帳には、お年玉を始め、これまで私に贈られた数々のお祝い金が蓄えられています。両親が将来の私のためにと用意してくれたものであり、管理はずっと母に任せています。しかし今年の夏休み、私の小遣いの使い方が原因で、この通帳の存在意義を考える機会がありました。

私の小遣いの額は、小学生時代は月1,000円でしたが、中学生になった今は倍の2,000円です。我が家のルールでは、学校生活に必要な勉強道具や、外出した際の飲食に必要な費用は小遣いとは別に用意して貰(もら)えることになっています。このため、普段は小遣いの使い道が特になく貯まっていく一方であるため、夏休みに入った直後は結構な額のお金を所有していました。

しかし、夏休みに友達と一緒に立ち寄った本屋で、以前から欲しかった漫画の単行本を見付けた私は、単行本が全巻揃(そろ)っていたことや、一緒にいた友達の「買っちゃえ、買っちゃえ」のセリフに気が大きくなり、１冊900円もするその本を思わず全巻まとめ買いしてしまいました。財布の中は一気に空となりましたが、また貯めればいいと簡単に考え、それよりも欲しかった物が手に入った喜びで満ち溢(あふ)れ、次の小遣い日までお金が無いという危機感を抱くことができませんでした。帰宅後、本の存在を両親に問われた際も、自分の小遣いで購入したものであることを主張し、小言を言いかけた母を静かにさせることも成功し、本当に幸福感でいっぱいでした。

しかしこの僅か３日後、小遣いが無いという現実が私の身に思わぬ災難として降りかかってきました。それは３泊４日の勉強合宿があり、宿泊先で購入してもよいとされていたアイスクリームやジュースを購入するお金が無いという事態が発生したのです。慌てた私は、小遣いのルールを引き合いに両親にお金をせがんでみましたが、食事代は合宿費に含まれていることや、小遣いを使用する機会があるにもかかわらず、自分の欲を優先した結果だと言われてしまい、結局貰う

© 金融広報中央委員会2022

ことができませんでした。そのため、合宿先では、友達が飲食しているのを横目に虚しい休憩時間を過ごす羽目になってしまいました。

その時の私は、何故たった1,000円程度のお金を４日も離れて過ごす息子に与えてくれなかったのか、私だけが飲食できず惨めな思いをすると容易に想像できる中で、私のことを不憫（ふびん）で可哀想に思えばお金を与えてくれることは普通ではないのかと、合宿中ずっと両親への腹立たしさが収まりませんでした。そのため、合宿が終了し迎えに来てくれていた母に只今（ただいま）の一言も言わず、不満を吐き出してしまいました。黙って聞いていた母は家に帰ると冒頭の私名義の通帳を差し出し、中を確認するよう言いました。そこには、私の予想を超える貯金額と、１行毎に、いつ、誰から、どんな名目で私に贈ってくれたかが事細かく記載されていました。そして最も私の目を引いたのは１回毎の入金額でした。数千、数万円単位の入金の他に数百円という少額の入金もありました。

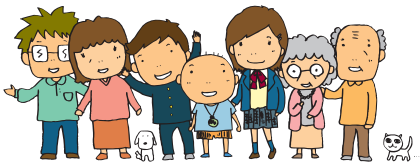
通帳をずっと眺めていた私に母は、通帳のお金で漫画本が買えるかと問いました。私は買えないと思いました。何故なら、そのお金で自分の趣味となる物を買うことは、お金を贈ってくれた人に対し申し訳ない気がしたからです。しかし小遣いは自由に使うことが許されているお金であり、何を買っても気が引けることはないと母に伝えたところ、母から、お金は労働の対価であり、小遣いは「親が働いた対価」を私に与えていることを理解できれば、通帳のお金も小遣いも同じ価値があることに気付くはずだと言いました。

その時私は、両親以外の人からお金を貰う時は感謝の気持ちを伝えますが、毎月のお小遣いは貰うことが当たり前であり、両親への感謝の気持ちが薄れていたことに気付きました。人から貰ったお金には、贈ってくれた人の労力が含まれており、だからこそ無計画に使うのではなく、自分にとって本当に必要な物かを見極めたうえで使うことが、お金を贈ってくれた人への本当の感謝ではないかと考えました。

今回の私の過ちは、毎月の小遣いの額以上の物を衝動的に買ったことで、両親の労力を無駄遣いしたことだと思います。これからは、両親への感謝の気持ちを忘れないためにも、毎月の余ったお小遣いはたとえ数百円でも通帳に入金するよう心懸けたいと思います。私の通帳は未来の私を助けてくれるものであり、私も自分のために備えていきたいと思います。そしてこの通帳に助けられた時に、私

© 金融広報中央委員会2022

にお金を贈ってくれた全ての人に、自然と感謝の気持ちが持てる、そんな人間になれるよう日々努力していきたいと思います。



© 金融広報中央委員会2022